

8月総評 西躰かずよし

作品から夏という季節が垣間見えるものが多くあった。生きていることと地続きの場所で作品は生まれるのだから、当たり前かも知れないけれども。俳句、詩といったジャンルを越えて、惹かれる作品があった。特に印象にのこったものについて。

扇風機だけが音である

世界に

たったひとつの祈りはあった 音無 早矢

「扇風機の回る音だけの世界」と書かず、「扇風機だけが音である世界」と書くことで、それは興味深いものになる。そこにだけ祈りが存在するのであるが、だからこそ祈りは切実なものとなる。「たったひとつの」という説明を加えるかどうかは判断が分かれるかも知れないが、これはこれで成立していると思う。

友人と云うには遠い人の自死 ベロニカ

「友人と云うには遠い人」という言い方は、その人との関係を読者に自由に想起させるような効果を生む。読み手は、仕事の同僚、親戚、同級生、学校の先生と、それぞれに遠い人を想起する。この作品がリアルに感じられるのはその言い方にあるだろう。読み手はそれぞれが想起した人の死にぼったりと出会うことになるのである。

寝転がる波に巻かれて

サンダルは

私の知らない青さまで行く 伊丹真

寝転がる波、サンダル、私の知らない青さ、それぞれでは単なる感傷の断片にしか見えないが、通して読むと、そこに、みずみずしい物語が展開される。私の知らない青さまで行くことは、作者の願望のようにも読める。

小説を読んでもうちに

日が暮れて

薄闇の部屋は

ニベア缶の青 春町 美月

ものに語らせる方法は俳句ではスタンダードであるが、短詩のなかにそうした技法を取り入れたかのようにも見える。読者は作品に導かれて、人物の動作から、その日の移ろい、部屋の様子、そして最後に

ニベアの缶の青へと行き着く。そのとき「ニベアの缶の青」は、作者のアンニュイな一日を映しだす鏡ともなるのである。

一時停止線の白さ夏の果

亀山こうき

俳句は3音でいろんなことができるので「一時」という説明的な言葉をあえて入れる必要があるのかとも感じられるかもしれないが、一時停止線とまで書き切ること、あの白線が思い浮かぶということがあるだろう。より具体的に書くこと（たとえば先の「ニベア缶の青」とまで書くことのように）で白や夏の果てという言葉が生きたものとなっている。

八月が終わる

卵に黄身ふたつ

細村 星一郎

「八月が終わる」というつぶやきの後に、二つの黄身を見たときの驚きが置かれる。この驚きは二つの黄身の卵を割ったという非日常性だけに由来するものではないだろう。非日常性を介することで、卵は単なる食料としてのそれではなく、ふたつのいのちという側面を与えられるかのようなようである。季節の終わりと、卵といういのちの終わりに同時に出会ってしまったときのような驚きが、ここには表現されているように思う。